

雜 錄

貧民窟探検記

山崎 源泉

夙ねて執筆しつゝあつた大阪に於ける救済事業の調査が、十月下旬に至つて一段落を告げた、然るに救済事業の對象たる貧民、殊に労働下宿、安宿、貧民窟等に制據せる貧民の生活状態を精細に調べたい、それには統計の數字や皮相の觀察では隔痒の感があるので、是非貧民労働者に扮して彼等の群に入り、親しく其實情を探検する外は無いと考へ、薄ら寒い十一月の二日から愈々貧民窟探検の途に上ることゝなつた。

記者は先づ變装用として破れ着物と古股引、古帽に古手拭を準備し、糸巻、手帳など一緒に前

部保安課に出頭して變装探検の旨を届け置き、直に四貫島へと志す。

西九條で五十歳許なる人夫体の男と道伴になつたを幸に、素知らぬ体でチョイト訊ねて見る。記者私は田舎から稼に來たが、口入屋で聞合せても若い者と違つて適當な仕事が無いさうで、非常に困ります、四貫島へ行けば働があるといふが、宿屋に泊つて尋ねたら分りませうか」

人夫体「近頃は減切り仕事が減つたわいな、四貫島へ行くと、職工や労働者の下宿が澤山あるよつてに、其所へ宿つて頼んだら可い」
と教へて呉れた。繼て朝日橋を渡ると道伴と別れて、教へられた方面へ行く、何々會社指定下宿とか、労働者御下宿などいふ看板が殆んど軒並に吊下つて居る、入口には宿泊人の名札が掲げてあるが、多きは四五十名、少きも二三十名は居るらしい。

記者は例の古袍を提げ、木綿中古の縞の羽織に同じく手織の袴を着てゐる所は、什麼見ても田舎の親爺が仕事を獲て來たと見られるやうで思

入るで急々下宿屋の入口に立つて見ると仲々這入り難い、今一先の方に行きやうと、家々を覗き込んで先へ先へ行く、就を見ても店頭で因業らしい親爺が、頑張つてゐる、那の眼玉で睨まれたら、直に化の皮を引剥かれさうで、何うも這入る氣にならぬ。六軒屋川口に沿ふて二三町も歩み更に跡戻りして今度は東洋紡績の前を西へ進んだ千鳥橋の上に佇んで暫時思案に暮れる。

宿屋の主人が「お前は何處だ」と尋ねたら原籍地を答へやう、「何時大阪へ來たか」と問ふたら數年前と云へば可い。「それでは今迄何を爲て居たか」と來たら何と應へたものか………使丁、人足、車夫………イヤ其時には又臨機の答辯が出るだらう。

思案は決つた、千鳥橋を右に見て河沿ひを西へ行く、此處にも下宿屋が軒を並べてゐる「ハタラクヒトハオイデナサイ」と假名書とは注意周到である。「人夫澤山入用」は大分掛直らしいが、兎に角労働者歓迎の旗印は心丈夫に思はれる。素通りして森集橋を渡り、傳法町を一週したが、怯

氣のつた記者は却々聞かぬが、更に引返して西九條迄跡戻り、遂々思切つて上之町の労働下宿へ飛込んだ。

店には四十恰好の主婦一人であつたからだ。來意を通すると一寸奥へ引込んで主人を伴れて來た主婦「仕事は有りますが、近頃は人が多過ぎかい暫く泊つて待つてなはれ、宿料は一日が三十錢の割で十日分預つてきます。すると四五日も経つ間に何か仕事が出ますやろ」

主人「四五日経つても必ず仕事が出るとは請合へんが………お前さん今迄何を爲て居たんか」
果然質問された、何だか變装者ではないかと疑はれるやうでドキツとする。克に角何とか言はねばならぬ。

記者「何と申して見らるゝ通りの風俗で百姓でありますが、まア日傭働や百姓仕事に雇はれて……」
主人「會社へでも勤めて居たやらう」

記者は殆んど一生懸命である、主人の眼光の尋常ならぬは商賣柄とは云へ、實は驚き入つた、が辛つと一方の血路を見出した。

記者「日傭仕事も仕事が出来ました所から、少々字が見えますので、お役場の手傳に二ヶ月許り……」

……それも仕事が出来て了つて忽ち今日の……」と随分苦しい曖昧な返答であるが、主人は案外平氣で、

主人「イヤ何道労働でもしやうと思つて大阪へ来る人は、大概筋は分つて居るが……お前力業は出来るかい、大分きついよ」

と来た、實は這回の探檢の準備として顔も日に焼き、頭髮も久しく刈らず、髭も夙くから剃去つて顔の下半部には二分許の短毛が萬遍無く生へ揃つて居る。善く見られて病人揚句、悪く見られると出獄人といふ体、であるのに今力業が出来るといふ危ぶまれるのは記者の面付にまだ本當に労働者の氣分が現れて居ないらしい。

記者「ヘエ、力業も覺悟がありますから、何でもやります。怎うか怎うか食へさへすれば結構です」

主人「イヤ宜しい。一つ宅で待つていなさい。それから」

分付て居ても宜しい、少々金は準備して居りますから」

主人「安いも高いも人夫の賃銀は四五十錢と決つて居らア、宿錢を拂つたら何も残らんよ、それでも生優しい仕事じやないぞ、早う國許へ歸らつしやいい、お前の様な羽織を引懸た人間に出来つこは無いわい」

記者「成程、服裝が不可ませんか、併し之は私の考へ違ひで、實はあまりな風だと宿屋が泊めてくれまいと思つて無理な算段して着て來ましたが、仕事者は別に持て居ますよ」

主人「宿屋も商賣じやからな、着物でも押へるちう事もあるが、まア俺等の方では法被、腹掛の股引仕立て、宿料の五日分も先拂する男が宜いのぢやお前金があるなら裝束から拵らへて來い」

有難う、然らば先づ裝束を買つて來ませうとて此家を出で、再び千鳥橋南詰を西へ「人夫澤山入用」と貼出せる〇〇屋といふ下宿に這入る。店には髭のある土方の親方然とした大男が居た、來意を告げると、

記者「實はお話申上げた通りの事情で、金とては一錢も有りません。爰に仕事を持て居ますから、今着て居る分と着更へて、此の羽織と袴とを預けませう」

と云ひつゝ靴を開いて、例の破れ着物を取り出して示すと、主人と主婦との間で顔藝七分で問答が始まつた、聽て主人は、當店は衣類は預らぬ、四貫島へ行つたら金が無くても泊めてくれる……と体よく斷つた。成程懷中と靴の中に眼を附けて居たらしいが、開けて悔しい玉手函、うまゝ探檢小手調の材料になつたわい。

二

第一回の試に勇氣を得た記者は、威勢よく四貫島に引返して朝日橋畔の一下宿に這入つた、今度は一向怖しくない。

記者「一つ働きたいと思ひますが、お世話が、願へませうか」

主人「此頃は何も無いよ、仕事なんか駄目だ」

記者「私も軒別に頼んで見ましたが、仕事がなく困つて居ます、賃銀は廉くても構ひません。又當

主「昨今仕事は隙だが、見受る處君は百姓らしいな、之が商人あがりだと斷るが、……まア五六日遊ぶ積りで泊るさ。所持金や荷物は紛失の恐れがあるから一切預る、金などは一錢も持て居ることばならんよ、何しろ泥棒や掏摸のやうな奴許りで少しも油斷は出来ないからなア」

といふ。成程なか／＼油斷が出来ない、と可笑かつた。仕事はあるかと訊くから、靴から引すり出して見せると、

主「フム……これが仕事着か、此の襪襦を着て尻からげたなら仕事があつても使つて呉れやしないワ、印半纏でも着て威勢の良い風をしない駄目だ」

といふ。追つて品々は買求めることとして、兎に角此の宿に泊り込んだ。二階へ上れといふから、早速登つて見ると驚いた、三疊、四疊半、六疊等の穢い室が廊下を中央にして、兩側に十室許並んでゐる、孰れを見ても慘憺たる有様で、片隅には汚い薄團が粗雑に積上げられ、坊主枕は垢で黒光りがしてゐる、疊は醬油で煮染めたやう、異臭が

ブン／＼鼻を衝く、廊下も畳の上も土砂でザラ／＼する所を見ると、掃除など滅多に爲たことはなからう。四五の室にゴロ／＼臥てゐるのや、腹這ひになつて何か讀んでゐるのがある、破半纏や汚れた着物が鴨居の釘に吊下つて、首吊のやうで氣味が悪い、記者は人無き一室に入つて武裝に取懸つた。

扱て爰に困る事は荷物を手許に置くことがならぬ。預けるとすると靴の中に納めて置く豫備の手帳や木筆や裏口其他を一切肌身に附けて置く必要がある。さもない時は、第一變装者といふことが暴露の虞れがあり、第二に自由行動を妨げられること夥しい。それで持參の手拭を引裂き、用意の針で早速の裁縫、シャツの左の胸に大きな衣套を作つた、之を着込んで洋袴下を穿ち、その上に仕事着としての褌衣を着て糸巻も名刺入も、眼鏡、裏口、手帳、煙草入まで悉くシャツの袋に詰込んだ、靴の中には着て來た羽織と袴だけを納めて、宿に預ける、宿費三割分の前納も相済み、愈々お茶屋の新米労働者が出来上つた。

／＼して汚いのも道理であると思つた。イデやこれから二階へ上り、お仲間共の中に交つて偵察と出掛けやう。(以下次號)

思

潮

▲感化事業大會

會議が、大阪府の主催にて昨日より開會せられつゝあるは注目すべき現象なり。感化法の發布せられて以來既に十五年を経過し、其第一條に「北海道及府縣には感化院を設けしむ」とあるが如く、今や全國に於て五十以上の感化事業を見るに至れるの時、斯界初めて試みられたる大會なれば、特に注意すべき事といふべし。世上困難なる事業多しと雖も、徳風を以て他を感化し、不良者を善良者とし、怠惰者を勤勉者とする程、困難なるもの蓋し少かるべし。此意義に於て、曠に感化の事業に當るもの、勞苦は之を没

夕方になると飯になる、土間に張板様の臺があつて大飯櫃が載せてある。グラ／＼する長い腰掛がその兩側に引添へた所は、何の事はない、大盛飯屋其儘である。先聲連中の爲す所を見習つて茶碗と箸を取つて來て飯を盛つたが、お茶をくれな。マゴ／＼して居ると側の一人が「オイ、お前お茶を取つて來んか斯様處で遠慮してゐると食ひ逸れるぞ」と注意して呉れた、早速お茶を盛つた皿を貰つて食事にかゝる。

炊き立ての白飯だが、ブンと一種の臭がする、所謂南京米の特徵だ。頗る下等の米と見えて甚だ不味い。イヤ殆んど砂を嚙むやうである。

お茶は大根とそうして其葉とを煮たのであるが之また決して旨い味でない、漸うのことで飯一碗を平げて止めた。腹は減つてゐたが喉に通らぬから詮方がない。

暫く二階の登り口に腰を下して見てゐると、續々労働者が歸つて來る。打見た所、随分怪しい風采の者が多い、中には印半纏に腹掛は固より股引を着けて居らぬ者がある、成程之では労働者とい

初めて感化事業の創設せられ、爾來歐洲各國に之に倣ふもの現出を經るの久しくして、研究と経験の積まれたるだけ、總ての點において歐洲における新樂の進歩せるや言ふまでもなし。我國においては、其發現の日の淺きのみならず、事業の数は五十以上に及ぶが如くなれば、各縣必ずしも感化院を有するにあらず、明治三十三年法律第三十七號の第一條の要求は、未だ全く充たさるゝに至らず、大會も初めて開かるゝといふ有様なれば、必ずや互に見を吐露し、經驗と研究とを交換し、探長補短の方法によりて、更に一步を進め、更に完全を期すること、最も必要といふべく、協議事項中には局外者の感服し難きものもなきにあらず、實際其局に當れるものに取りては、興味も必要も少からざるべく、吾輩は各當事者の遠く四方より來りて此會に列せるを多とするもの。教育感化の正義方法、感化院の管理經營維持、退院兒に對する監督授産等の處置が、之によりて面目を新にする如きあらば、實に社會の幸福、國家の利益といふべし。

感化の理想よりいへば、成るべく短日月の間に、入院の不長者を感化矯正して善良のものとし、退院就業、其家庭に幸福を齎し、併せて社會に貢獻するの多々益々これあるに外ならざれど、人道正義の本源として仰かる、皇室と最密の關係ある宮内省の願官に不義不正の敗徳漢を出し、感化教導、安心立命の道と與ふるを以て唯一の事業とする宗教の大本山に高僧碩徳として編を利かせた

貧民窟探檢記

源 泉

三

聽て二階へ上る、電燈は廊下に三箇所點されてあるばかり、室内に都合よく燈先の入る室もあり僅かに入口をのみ照せるもあり、彼方此方の部屋に數人宛陣取てゐるもの、喚くもの、語るものなど色々であるが、薄暗い一室では四五人の連中が頻りに何か話して居る、記者はその一隅に坐り込み新參の挨拶をしたが、胡散な奴どもで警戒してか、誰も對手になつて呉れない。

彼等は今日の仕事の難易、監督の寛嚴、明日の仕事の有無など盛に話して居る、先づ大體の様子

は此の會話を聴けば分ると思つたから、黙つて聽した。別に取留めた事もなかつたが、彼等の生活に於ては此の下宿樓上の儚なき自慢話が責めてもの娛樂であらうと感じた、追々何處へか這入て寢に就く様子であるが、記者には誰れも構つて呉れない。何の室へ如何して寢るのか薩張り解らぬから、恐る／＼一人に訊くと、彼は頭を枕から擡げて、

△「何處でも可いからな、誰か一人寢て入る蒲團へ割込むさ……………オイ藝州、お前は獨りボツチだから、此のおつさんを入れてやれ。」

藝州と呼ばれた男は、黙つて蒲團の片端を譲つて呉れる、記者は武裝のまゝで其處に潜り込んで小さくなつて臥たが、さて却々睡れない。何しろ息苦しい程懷中へ諸品を詰込んで居る上に、汗臭い可厭な香が紛々と襲うて來るので堪つたものでない。それでも何時しか睡氣を催して來た。

汗ばんで虱か蚤が頻りに痒い、早速寢床を飛出して階下に行くと、飯を食つてるものやら、出掛け

る者やらで引繰反るやうな騒ぎである。劍突やら狼狽やらを喰つた後漸く洗面所が分つて顔を洗ふ

二階へ上つて見ると二三人は未だ寢て居る。病氣か休業かは知らぬが落着いたものである。

臨時人夫的勞働は別に技倆を要する譯でない、唯だ相應の体格が有ればよい、だから雇主なら人夫請負人は日々集り來る勞働者の中から所要の數を採れば足る、目分量か順番か又は抽籤かで決するから、勞働者は唯だ僥倖を希つて日々仕事を求めるのである、昨日仕事を待た甲は今日之を失ひ

記者「私は今日何處へ仕事に行つたら宜いでせう」

今日業に就いた乙は明日溢れると言ふ風で、常に失業不安の状態にある。營養の不足は著しく一般

記者「番頭さんは何の人ですか」

に不健康の狀を呈してゐて、勞働能力の十分な者は殆ど無い、勞働不能者——浮浪者——となる時

有りや言つて呉れらア、抛つとけ／＼」

も遠くはあるまいと憶はれる。而もその勞働者の九分九厘までが青年及び壯年者だから驚く。

朝飯を食つて見たが矢張り鼻について食へない。軽く一碗で切上げて二階へ上り、素裸体になつて虱退治をやつてゐると、先刻出て行つた連中が續

記者は探檢の目的を達する種々の便宜を得たいそれには早く仕事にも出てゐる必要がある。毎日

沿れ通して下宿の留守番では、徒らに時日を費すのみでは役に立たぬ。聞けばお菰風よりも法被姿の方が賣口が良いといふ、さもあらうと思ふ。殊に斯う諸式諸道具を唯一の衣套に詰込んで動作の上にも不自由である。そこで一工夫するべく下宿を出た。九條通りの古着屋を片端から漁つて、印半纏、腹掛及び脚絆を買つた。無論成るだけ褪げて古けた品を選んだのである。之は主として正真正銘の下等労働者と見られたい爲であつた。品々を買ひ求めると早速店頭で失敬して身に着ける偉く見られるやうに粧すると異つて安つぱく見られ、たら可いのだから譯はない。

下宿に歸ると店頭に居た番頭君

「イヨ―上等々々」と褒めてくれた。大威張で二階へ上ると溢れた連中がゴロ／＼して居る。大分顔馴染になつて對手になつて呉れるが、是も一半の功は装束にあるかも知れぬと思ふ。

「甲」おつさん何處ぢや」
乙「フム泉州か、此處の下宿つたら酷いぞ、南京米に榮葉ばかりよ」
丙「お前、從來何處の部屋に居たんかい」
談は夫れから夫と進んで行く、部屋とは彼等社會に於ける勞働下宿の異名である。
記者「私は餘程以前に土方もやつた、近年は屑屋になつて稼いでゐたが、元手もなくなつて困つてゐたら、或人が四貫島の下宿へ行くと仕事は幾何でもある。金の十圓二十圓は直に働き出せるといふから來ました」
丁「馬鹿な、百年居たつて三文も残りやしないワ」
一昨日も二人突走つた、散々食ひ倒して……」
記者「一日に七八十錢から一圓近くの日當が出る」と聞いたが……」

「去年は、一月の内十日が廿日か溢れて、日々三十
一銭の宿泊料を拂つて足りつこはないワイ」

「俺等來てから十三日になるが、たつた二日仕事に引懸つた限りだ、宿には烟草の五錢玉買ふ錢も貸して呉れないからなア…………好きな烟草も斷つてらア」

記者は早速烟草入を拋出すと俺も一服く

四

勞働下宿の止宿人は大抵若盛り働き盛りの者であるが何故に斯くも悲惨な生活に嚙り附いてゐるのであらうかと、段々研究して見ると夫々に氣の毒な事情がある。大部分は地方に適業なきため、若くは都會に利益が多からうといふので飛出して來て、さて職を求める一段になると保證人がない知人があつても保證人の責任の重大なる事を恐れて、容易に承諾しない。ところが日雇人夫の類なれば、保證人が無くても勞働下宿や人夫請負が引

請ひて呉れる。特に人夫頭の部屋とか、勞働下宿は仕事の有無に關らず、即日から食はして呉れるといふ所から、止むなく日稼勞働者に身を預け、浮浪の徒と伍して生活せる間に、遂に頽敗遊惰の習癖が心身を虜にして下ふのである。

記者は更に連中に向つて話を挑む。

記者「其處に仕事が少ないと下宿屋は損するばかりでせう」

「甲」此麼慘い事は從前餘り喰はさなかつたが、近頃は全く働が無いよ。夫れも一つは勞働者が無暗に多くなつた所へ世間は不景氣と來てるから、毎日大の男が十人二十人の居喰ひといふ始末、下宿屋も堪らんワイ」

乙「何で下宿屋が損するもんかい那のチャン／＼米なら一升十二三錢だ。一升食たつて知れたもんだ。夫々お菜なんか三度で三錢も要るまい、汚い煎餅蒲團へ二人も抛り這んで一日三十一錢とは酷

いッ、其上働く奴の頭も刎ねるからナ」

「『仕事が無くて大きに仕合せだ、第一那麼食物で二十日も一ト月も働けると思つてゐるかい。食へば食ふ程精力が落ちるから不思議だ……肝の虫じやアあるまいし阿呆らしい』」

談は破れて一座哄笑する。氣焰萬丈却々盛んなものだが。滿更出鱈目の放言でも無い。實際あの米であの待遇なら一日十五錢の實費は要るまい。十五錢とすれば一ヶ月で四圓五十錢になる。さすれば五十錢の仕事を九日働かせたら下宿に損は無い更に三日間も仕事に出すと營業を維持するだけの利益はある。併し夫では労働者が堪らぬが、仕事が無くば是非も無い事であらう。

午後四時頃には更に一人の新参客があつた、彼は二十四五の若者で、来る早々から平氣の平座である。

「……吾は斯の道には慣れてゐる」

「……若者であつたかと思ふに、運が好かつたと思ふな、堪も無い事を、天下の一大事が何ぞのやうに、口角泳を飛ばして論じてゐる。併し人は皆境遇に伴ふ一大事がある。彼労働者の爲には此等の事が天下の一大事以上かも知れぬ。

三十餘人の止宿人の七八割は十七八歳から三十三歳迄の若者で、餘の二三割は三十四五歳から四十二三歳迄の中老人であるが、妻子あるものは一人も無い、彼等は終日労働するも、其労働能力を回復するに足る營養だも得られぬから、年齢の割には一体に筋肉は瘦せ血は涸れてゐる。

三十歳前後と云ふ生涯中で最も労働力に富み、最も収入多き時期であるに拘らず、尙ほ妻帯する餘裕が無いとすると、今後幾年月を経過するも恐らく此の儘であらう。否妻帯どころか、日々粗惡な南京米で、僅かに飢を凌ぐに過ぎぬやうな悲惨な

新参「ウム俺は生れは京都だが久しく關東地方を經巡つて、先々月神戸へ舞戻つて昨日まで働いてゐた。神戸は造船所の仕事なら幾何でもあるよ」

記者「當地では御仕事が無いそうだが、君はユライ處へ来たものだ、神戸に居ると可かつた」

新参「少々金が残つたから、金儲の附着いた装束を棄て、此装束を古手屋で仕入れ、昨日福原へ登樓て了つた。朝つばらから大阪まで御徒歩だ、ハッハ、ハ、」

元氣な男だ、斬髪も新しく男前も好い、腹掛けも股引もシャツも振つてゐる。が不思議な事には法被を着てをらぬ「寒むッ、寒むッ」と胸震ひする記者「今夜は大分冷わる、君は法被は……」

新参「法被と帽子と煙草入れとは宿へ質に取られた……なアに、五六日も働きやア返して貰ふサ」

夕食の報知がある。一同盛んにバクつく。續々外出者が歸つて来る、又一時雜談が賑ふ。某々の仕

生涯を送るやうな骨肉を砕く勞苦に服しつゝあるのである。……就寢する。記者は昨夜の先生を捜して見ると、早や雖かと臥て居るので、今夜は他の一労働者と同衾した。彼の寢物語に依ると、此下宿に來てから十日許になるが、毎日溢れ通して今日初めて仕事に行つた。ところが豫て脚氣の氣味であつた所へ俄かに劇しい勞働をした爲め非常に苦しいさうであつた。産地は播州実栗郡だが父には早く死別れ、母は自分の幼き頃失踪して行衛知れず、年頃尋ねるが、更に分らぬ。病む毎に一人母が偲ばるゝとて、廿歳前後の今も尙ほ泣き焦れてゐた。記者も暗然として貰泣した。記者の隣に十六七才の少年が臥てゐる。彼は加賀の産、父母の命で大阪に奉公に來た、初は知人の引請で、本田のうごん屋に勤めてゐたが、辛つくて堪らぬ。再び口入屋へ相談すると然らばとて世話して呉れ

たのが鐵工所の人夫であつたといふ。一ヶ月に十日餘も溢れるから金は残らないが、うどん屋のやうに窮屈でないから良いと云つてゐた。

記者は少年には故郷へ歸るべく病人には氣を安んずべく忠告した。風の攻撃と蒲團の臭氣で睡られぬまゝ、牛馬の如く働き、粗惡な食事と不潔な寢具とに刹那の慰安を求めつゝある彼等の生涯を想ひ闢らした。夜は森々と更け渡る。病人は時々呻いて居る。(未完)

救濟旅行雜詠

愛媛縣立自強學園長 松井 豊吉

○知事官邸にて

名にし負ふ 大久保の君 ませばうべ
知るも知らぬも けふや大阪。

○修徳館主の心を

花のかり 實のかりは こそわがねの

七山とこそ 人はいふなり。

○三門學園の特長

八千草の 色香のみかは庭守の

こゝろもにほふ みかど學園

○同園主の人格

旭川 水の心の廣ければ

つるみの橋のたよらぬやなれ。

憂きことを それども知らぬ君はげに

あかぬながめの 後樂のその。

○斯道學園

なごそかに 御勅語誦して龜命山

朝のむしろの 妙へにかしこき。

○同校生徒の梅花に寄せて

うぐひすは まだきなかぬに梅の花

かほりも高し 高松のさこ。

人こそ知らね 君がおもひは。

○學藝會にて

人の行く 十三の橋長けれど

子等が たのしき まどゐ短かく。

○博愛社

大海の 廣く深きをこゝろにて

守るや 神の博愛のやど。

○同社理想の圖に題す

うつ鍬の 深きを見れば うなゐ子が

心のはたも いつかひらけつ。

○土山學園主を

今よりは 師とは言はじな 君を呼び

たい父とのみ われは慕へば。

○同園を見て

須磨明石 にはあれども つち山の

園のまきみの麗はれき哉。

○栗林公園

くりかへし またくりかへしあかざれば

くりの林の園といふらん。

○屋島古戦爭

音をなみ 春日うらゝに 屋島渦

音をよそに 眞帆の三つ四つ。

情けてふ情けはあれど情けすと

知らぬ情けにます情けあらじ。

情けある我れならなくに夜さむより

人もさこそと身に知られつゝ。

人よ來よ來りて見よや目に見えぬ

神の姿の 見ゆる此の家に。

雜 錄

貧民窟探險記

源 泉

五

不圖大聲に呼起されて夢が破れると、

「早く起きんか、仕事に出るのだ」と怒鳴つてゐる、應と答へて早速起きる、固より法被、脚絆で臥て居るから世話は無い、其儘階下に降りて顔を洗ふ、相棒も下りて来た、是れは昨夕新參の若者である。何時だらうと時計を見ると午前二時、此の夜更けから何處へ行くのであらうと思ひながら直ちに飯を食つて了ふ、番頭から人夫送状とでも云ふべき書付と辨當を貰つて、宿から半町許り隔たつた△△屋といふ大きな下宿兼人夫請負人の許に行つた。

△△屋でも我々と同じ方面に行く労働者は續々と来る、昨夜が眠れたのかと思つたら未だ三

時にならんのぢやないか」等と口々に小言を云ひつゝ飯を食つてゐる、應て一同と共に、附近の貸車屋へ大八車十餘輛を借りに行き、一行三四十人が二手に別れて一隊は梅田譯へ、余等十餘人は天王寺驛へ向つた。何でも今四日午前七時に西驛へ向けて宮内省出の大演習御用品が着するさうで、それを大阪城内と天王寺公園内に運搬するのだといふ。

晩秋の拂曉は肌寒い、車の軋る音で沿道家々の夢を驚かして船津橋に向つた、この橋へ迂回しなければ車を通すべき橋が無いからである。四貫島から船津橋を経て天王寺驛までと道程は約二里半もあらう。一輛二人附であるから記者は同宿の新參と相棒になつて、途中話しながら連中の後へに従つた。下宿に來た點では彼は記者より一日後れだから此意味に於て新參でも、労働者としては功を經た古狐である。彼は記者の間に應じて道すがら労働學の一斑を授けてくれる。

若し労働下宿は土方の部屋と同じ仕組であるが、自體が宿屋看板であるから、仕事さへ充分有れば

便所が提供され食物が給付されて身体が豊かである。夫れ等仕事に切れないのは嗜いた物を食つて補ふことも出来るが、臨時人夫や人足仕事では駄目だ。

記者「土方の部屋だと食物が善いですかい」

若者「土方の部屋へ素人が飛込める場合は親方が何か一つの工事を請取つて仕事に懸つてゐる時だから、雨天の外は日々働くのだ。又抱へた人夫其の身体も相當に養はないと働かぬから、飯も力のある奴を食はせるし、汗も生臭物で、おまけに晩酌位は附くよ。勘定は無論工事完成の後だが、小使は貸して呉れる、お前土方になる方が宜いせ工事の下請でもするやうになつたら旨いものだ」といふ。それでは君のやうな血氣盛の若者が何故労働下宿に來たのかと訊くと、

若「ウム、夫れはまあ一寸足溜りさ、何か良い仕事が見付つたら飛出すよ、浮む瀬の無い下宿だが仕事が無くて南京米だけは食へるからナ、文無しの時下宿住居に限るナ」。

談話が興に入つた頃はいつしか難波驛の南、煙

草賣局前を東へ進つてゐた。夜は涼しいが明け放れる。東關屋町を東へ横切つてと有る巡查派出所の前を通ると、忽ち怒鳴り付けられた。

「コラッ！なせ頬被りを爲よるのかッ。」と斯うである。相棒の若者は帽子を宿に預けたので、朝寒を防ぐため手拭を冠つてゐたのである。數箇所の關所も無事に過ぎて來たが、夜中は赦して呉れたものと見える。早速手拭を除つて恐縮すると巡查は後方を見てブラリ／＼。

之を機會に労働法律學を教へて呉れる、頬被り鉢巻は禁制だと云ふこと、決して車を曳いて人道を通つてはならぬこと、向ふから來る車を避けるには必ず左方に避くべきこと、軍隊に出遇ふ際は變則で右側に避くべきことなどであつた。

日本橋筋五丁目から斜に下寺町四丁目に出で、公園に沿ふて應て天王寺驛に着いたのは彼れ是れ六時頃でもあつたらう。府市のお役人が二人先着して居る、七時になつたが豫定の貨車は來ない、多分九時の列車だらうから休めとのお詞が下りる。一同腰を下して例の大平樂を吠へ出した。記者は

四十拾好の一労働者の側に割込んで、努めて粗暴な詞で話しかけた。詞の丁寧なのは彼等に輕侮せられ、且つ遠ざけらるゝ所以であると知つたからである。

記「お前の生國は何所だ、何年程労働をやつてゐるかい」

○「俺は江州だ、何年といつて忘れる程前だ」

記「働くには下宿が一番良いだらうかナ」

○「根據地か、いろ／＼あるな、下宿安宿等は古

いが、近頃自強館といふが出来た、惠美須町にも同じ宿がある。」

記「下宿は宿料が大分高いやうだが、安宿に泊つて自前で働いたら如何だらう」

○「それも試つて見たが、仕事に溢れたら最後、宿料は固より大盛めしの一碗も食へなくなるから堪るもんか、併し此處になると下宿にさへ居れば飢ゐる心配はないものナ」

記「自強館や惠美須町のは什麼だらう」

○「彼處は全く泊り心地が良いナ、第一座敷が奇麗で家具が清潔であるも、風呂は只で浴れる

労働者と浮浪徒とを隔ち分けて、前者を保護し下成長せしめると、次第に定業に従事する者が増加するだらうと思ふ。

九時頃に目的の貨車が着くと、數臺に分載して、天王寺公園へ運搬する、一回運んで中食になる。宿から貰つた辨當を開いて、箸を刺すとバラ／＼と粒々悉く離れて箸に懸らぬ。辨當の一隅に喰ひ付いて口中へ掻き込むと、大部分は外へ溢れて了ふ。無論味は殆んど砂を嚙むやう。詮方なしに驛の水道栓の側に立つて水漬にして流し込んだが、流石に飯の名の付いた丈の効能はあつて、午前二時から約十時間を経た空腹を癒した。

午後殘餘の荷物を運んで二時過ぎに終り、再び空車を挽いて一行數輛が縦列になつてガラ／＼四貫島へ歸り着いたのが四時過ぎであつた。何分往復四五里もあるから、仕事は案外容易であつたに關らず、脚は大分草臥れた。

さて之で労働下宿に於ける探險は一通り相済んだ。此上宿泊して居て別に得る所はあるまい。第一不潔な夜具の中に素性の知れぬ男と同衾せねば

そりや四貫島邊りの労働下宿に比べたら穢多と華族さん程の違いがあらア」

記「夫ではお前達は何故彼處に泊つて居ぬのか」

○「いけない／＼、泊りは結構だが安宿と同じ口でナ、仕事の世話は一向出来ない、加之に夜が明けたら直に追出される、仕事がある時は可いが仕事の目的がなくても一日外でウロ／＼して日を暮さねばならぬ、雨の日などはナ實に困るから」

話は夫れで切れた。聞けば一々尤である。

六

労働者多數の言に依ると、彼等も既に公設宿泊所の衛生的で且つ廉な事を認めて居るが、唯だ遺憾なるは仕事供給の設備が伴はぬ一點である。何とかして四貫島界限に此等公設宿泊所を設け、兼ねて人夫請負を實行して貰ひたい。夫には無論強制労働及貯金を宿泊許可の一條件として、一定期間は拂戻さない事にする、そして賃金と日銭率を公表して、労働をして自立自衛の氣分を以て仕事に従事せしめたなら、今の下宿に於ける労働者の墮落を救済も得ると思ふ。斯くて比較的善良な因

なもののが輩もゐる。そこで宿へ歸ると直ちに「労働に堪へぬ」といふ意氣地ない口實で服を取つた。

下宿を去つて源兵衛渡を過ぎ九條通三丁目に来ると「夜間無料診療……」中條藥局といふ大看板が出てゐる。東區空堀の高松藥局が醫師を置いて廉價診療を行つてゐるが、その流義を夜間

だけ實行して居るのであつた。東京實費診療所の成績を羨しく思つて居る記者……大阪に唯一つの高松藥局が種々の壓迫のため、其事業の頗る振はざるを残念に思ふと同時に、多數藥劑師中一人の高松氏に聲援するもの無きかを怪んでゐた際であるから、此の看板を見て飛上る程嬉しかつた。

千代崎橋を東へ、瓶橋を南へ、難波芦原町に工事中の電軌道に沿ひ、木津北島町附近貧民窟の夜景を眺めながら、今宮新家に出で紀州街道脇の一安宿に泊り込んだ。附近には大小幾多の安宿が軒を並べて居るが、記者は特に大きな立派さうな宿を選んで這入つたのである。そうして七錢、八錢十錢の三等級の中の十錢の白切符客とは相成つた夜具や座敷が清潔であつてはしる。

労働下宿とは異つて土足のまゝでは塵敷に通さぬ。草鞋を解いて足を洗へといふ。早速井戸端で足を濯ぐと二階の一室へ案内して呉れた。三疊敷の小藁張した室で、畳も割に清潔である。風呂に入れとの案内に、行つて見ると四五人を容るゝに足る浴槽に一人の男と、子連れの婦人どが這入つて居る。労働下宿に於ける二日間の不快を洗ひ去つて室に歸ると、早や夜具が持込んである。満更の垢染衛門でもないが、襟裾は随分附着いてゐる、之を見て、不圖妙な恐怖に襲はれた。

宿屋の夜具は實に恐るべき病毒傳染の媒介となる虞れがある。特に此等の安宿に於ては一層危険が多い。四貫島のそれに比べると誠に結構ではあるが、一念茲に及ぶと心配で堪らぬ。早速用意の針で風呂敷を縫着け、當座の掛襟とした。さて誰か話合手もがなと起ちつ居つしたが、駄目であつた。十銭客は減多に無いものと見て、此處樓上の一角に獨りぼつちの惨狀、之は確かに記者の失敗で、財料の舉りやうがない譯である。矢張り探險は小ぢい下等安宿に泊込んで、八疊の塵敷に

乞食、順禮と枕を並べねば駄目であると悟つたが、今更變換も變てこなもの、宜しく戶外貧民を探險すべしと決心し、再び例の印半纏腹掛に身を固めて外に出た。

一寸斷つて置くが記者は頻りに不潔呼はりした、虱を怖がつたりするが、決して華族様の落胤でもなく、又金持の倅でもない、實は子供の時から今日まで貧乏の直通列車で、ソヒぞ脱線した事はないが、穢くつても自宅は左程苦樂にならぬ、夜具や疊も素性が解つてゐるからである。併し宿屋のは、さうは參らぬ、特に虱や蚤は大嫌ひで、南京虫に噛まれると一週間も腫れ上るといふ男、此度探險實行の苦痛も、主として此點に存するの、ホニに瘦せるやうに覺ゆる苦しさである、恁麼お察しが願ひたい。

七

安宿の門口は即ち紀州街道で、此處今宮村新家の不潔な貧民區、兩側にも横町にも、安宿が澤山ある、街道の兩側は關東煮、焼餅、上燗屋等露店の燈光が油煙を揚げて小市街を作つてゐる。その

軌道を隔て、新世界の火光が手に取るやう、とても貧民の巢窟とは想はれぬ程である。

種々の工場に工事に終日人夫人足を働いて得た金の中、七錢の木賃宿料を支拂つた彼等の儚なき歡樂の料に供せらるゝ。街道露店の間々の薄暗き處には怪しげな女が三々伍々白き物を塗り立て、徘徊してゐる。即ち有名なる今宮名物の下等賣春婦である。

『兄さん、もし〜』など、頻りに誘拐を試み、續々生捕つて何處かへ連れて行く。

春の價は十錢乃至三十錢位で、安宿生活の女や附近貧民窟の娘などが内職若くは本業にして居るさうである。中には種々の経路から誘拐されて悪漢の手に落ちた女が強迫の下に餘儀なく淫を騙いで居るものもある。随つてそゝ營業振にも本人直接路傍に網を張る自前稼ぎと、引子を出張させて一定の淫賣窟に連れ來らしむるは抱へとの別がある。抱へは多くは誘拐墮落せしめた親方が彼等をくひ物にして居るのである。

私娼即ち賣春婦にも高等中等下等の階級がある、今宮附近に出没する者は最も下級に屬する者で、その九分九厘までは梅毒に罹つてゐるといふことである。何故に斯る悲惨な境遇に墮落して來たのであらうかといふと、それには憫むべき事情の者もあり、又本人の不心得より斯に至れるものもある。曾て其筋を調査した所によると、私娼千人中、其半数は生活難の爲めに、他の半数は他人の誘惑に原因してゐる。生活難といふ中には日々の生活の資を得んとする單純な理由に依る者が其九割を占め、其餘は親が金の爲めに養女に遣せし者、不具癡疾の夫を養ふため、子供を養育するため、情夫に捨てられ、若くは保證人がなくて堅氣の奉公出來ざるため杯いふ氣の毒なものがある、他人に誘惑された中には口入屋、知人の誘惑、宿屋の主婦其他困つて居る際に世話を受けた人の誘惑等が主なるものであるが、他に労働が厭で賣春婦となつたもの、着物を拵らへんがために淫を賣るもの等が千人中百五十人もある等は他人の誘惑が直接原因だとは云へ、元來の精神が腐つて居るものと見て

差支へない。

今宮、長柄、九條等は下等賣春婦の巢窟で、福島、高津の界限には高等中等の淫賣窟が澤山あるといふことである。是等が恐るべき花柳病傳播の媒介となつて、戦慄すべき頹敗世界を建設しつゝあるから堪らぬ。記者は新世界の裏筋から、公園内を逍遙したが、不幸にして多くの怪物に出遇はなかつた。炎暑の候と違つて夜半後の公園は寂として人影もないのであるから無理もない。記者も早や足なかりと思ひ切つて宿に歸つた。

翌日は十一月五日、朝來天候頗る不穩であるが宿泊者の多数は夫々何れへか出掛けて行つた。宿の主人の語る所に依ると、同家の宿泊人の大部分は、男は道路、溝渠の修繕、電信電話の布設、其他の工事に臨時人夫となり、若くは仲仕手傳車夫等を稼ぎ、その妻女は附近の工場に働いて居るさうである。此等は夫々一室を借切り、自炊して居るが、他の獨身者や老人等には車の先曳、紙屑拾、土占賣等が多い。

此等は宿の設備が、二階に附屬する。

乃至六疊敷の客間に仕切り一様の宿泊者を泊め、階下は狭い通り庭を縦横に通し、その両側を各室三疊敷宛約二十戸分に壁仕切とし、簡易借家としてある。蒲團付にて一室一日十七錢と十八錢との二種あるが、室内には押入も何もない、唯各自に棚を釣り、其上に食器や小道具を載せるのである。晝間は夫婦共稼ぎに出で、其日々に得たる勞銀の中より十七八錢の家賃を納め、米、野菜、魚のアラ等を買ひ來り、別に設けられたる共同炊事場で煮炊をするのである。一日十七八錢といふとケ月五圓三四十錢の家賃になるが、蒲團一人前と浴湯付で、炊事用の器物は共同であるから、借家は誠に世話が無い、此種の貧民に取りては確かに便法であると思ふ。

曾て大阪自瀝館が二三年前から計畫して、未だ實現するに至らなかつた簡易借家の經營をば、大概の安宿營業者は既に立派に實行して居るが、之を公益事業として經營すると、一日十錢位で貸す事が出来るさうである。家族の多い者は別に蒲團を借りるのであるが、それも汚い割に随分不廉

であるが、是亦清潔で安直に供給し得ると思ふ。さて此宿で高等安宿の状況は大体分つた、更に極々下等の安宿に泊つて見たい。虎穴に入らずんば虎兇は獲られぬといふから、虱や蚤や南京虫とお友達にならねば、貧民生活の真相は解らぬ。厭な事だが是非が無いと腹を据へた。いでや立ん坊や順禮の群に交つてドン底の窮民状態を調べてやうと決心して、此宿を退去した。

何處かに穢い乞食宿もがなと彼方此方搜し廻りと有る横町で食相な安宿を発見した。

記「當分泊めて貰ひます、一番安いところで……」主「一番安いのが七錢だす、二階へ上つた左側の座敷で……」

簡單明瞭で手輕なもの、大分斯の道に慣れた記者は心得顔に二階へ上る。廊下の左側は六疊三室ブツ通しの雜居室、隅々には定泊りの先生が陣取つて居るのが、夜具や食器が置いてあつて、一方の壁際には蒲團が山のやう。

積上げた夜具を捨すると、流石に垢と膏で煮染めたやうで惡臭を放つてをる。それでも大分眼慣

れたぜいが。最初ほど厭な氣持にもならぬ。用あり氣に二階の彼方此方を觀察して見ると、此の十八疊の雜居室と廊下を隔て、右側から突當り一体は三疊又は四疊半に仕切つた室が十ほどあつてその多くは夫婦者や子連が陣取つて居る。此家の一室一日十四錢だといふ。階下は店の室六疊が宿屋一族の部屋で、其他の大小七八室は宿泊人の借切になつて居るらしい、奥庭に井戸があり、其側に共同竈、洗場、浴室などある、炊事場に隣つた便所といつたら、實に不潔を極めてゐる。

宿泊者の中夫婦者の生業は猿廻し、八卦見、辻占賣、紙屑拾、車夫等が主なるもので、獨身者の多くは道路、順禮、偽坊主、車の先曳といふやうな事を仕事にして居る。多数は老人や半病人であるが、青年血氣の者も少々混つてゐる由、道路、坊主の類は、米の貰があるところから、大盛めしを買はずして自炊してをるが、一樣に時々食つたり、食はなかつたりして、兎に角生命をつないでゐるのである。(續く)

するを教旨とす

一、本部は左の項に當る貧兒孤兒を入寮教育するものとす

一 年齢五才以上十三才以下の貧兒孤兒

二 全年齡の貧兒、但父兄疾病逃亡入獄等にして養育し能はざるもの

三 全年齡の惡癖ある兒童にして、父兄ありて衣食の如きは給與し得るも、之を矯正し能はざるもの、但衣食費を要す

一、本部は、育兒に對し、家族として、衣食教具其他總てを給與するのみならず、父兄の心を以て、教養感化の責任に當る

一、育兒の養育年限は、滿十五才迄とす

○本部の敷地建物は明治四十一年一月舊寮舎朽廢の極点に達し危險尠からざるを以て義捐金を募集し同四十二年一月地を現在の所に相し畑地三千九百三十坪を購入し寄宿舎二棟、(男子部と女子部)教場、事務室、食堂、炊事場、浴室等を建築したるものなり、同年七月移轉したるが此費用に金一萬六千餘圓を要したりと、平家建

にして空氣の流通宜しく畑地には麥作の成育し居るを見たり

○收容兒童入數は目下八十餘人なるが經費に限りあるを以て無制限に收容する能はずと云ふ、且つ養育年限を十五才と定め居るを以て、同年齡に達する時は退院せしめ更に之を別働隊とも云ふべき自活團に收容することゝ爲せり、是点は甚だ窮乏なるが如しと雖も財政上止むを得ざることなるべし、而も自活團の組織ありて其缺を補ひ居れるは多とすべし

○育兒は塾舎を男子部女子部に分ち、育兒の年齢體質、趣味、言語、舉動等を研究し、九ヶ室に分收し一室に拾名宛を起臥せしめ、善良なる年長者を室長に充て、教育部長なる塘林氏は家族と共に塾舎の中間にある一室に起臥し、万般の監督指導に任じ、教養感化の中樞と爲り居れり育兒の學齡に達したる者は寮内なる教場に於て小學校則に準據し、尋常高等科程を授け、又女子には裁縫を男子には農業を實習せしめ居れり○育兒の成績は滿十五才に達し卒業退寮せしむる

時は熊本市内外商店工場は勿論遠く台灣、朝鮮等より、見習生又は徒弟其他に續々引受希望者ありと云ふ、今創立以來約二十年間に各種の事業に従ひ居る者二七八人中に就き農商工以外其異なれる者を擧ぐれば

陸海軍準士官並に下士…一五 同兵卒…二五

東京苦學…八 米國苦學…一 朝鮮語研究…

一〇 養蠶見習…八 新聞記者…二 印刷…

二五 新聞業従事者…八 看護婦…三 官吏

…三 本寮保婦…七 師範簡易科卒業並教員

…二 製糸傳習生…一一等

なるが何れも斯く相當の職に従事し得るに至りたるは塘林氏教養の結果たらすんばあらず

○教員は創立後明治三十二年迄約八年間は寮主塘林氏及同氏妻乙亥子専ら教授の任に當りしが、同三十三年後は師範學校の教生一週間交代にて教授の任に當り居たるが同四十五年三月同校學科規定の更正に依り中止せりと、されば同年四月以來は本寮出身卒業者三名を臨時代用教員として採用し熱心教授の任に當り居れり

○經費は大正元年度の部に依れば左の如し、而して白川學園と同じく、寮主は經濟上に苦心を要せざるを以て教養に専心従事することを得べし一金四千六百四十九圓九十六錢八厘

内譯

金千〇五十四圓二十錢

事務費

金三千五百八十五圓七十六錢八厘

生計及教育費

金十圓

修繕費

以上は其概況なるが序に塘林氏の人と爲りは一見素朴の体にて熱心眉宇の間に現はれ、毫も外見を飾り若くは厭ふが如き狀なく、洵に無邪氣なるが如し、此人にして始めて本寮を背負て行くことを得べしと、余は仰敬の意を表しき、尙ほ次號には同氏が苦心の宿れる自活團を紹介すべし。(未完)

貧民窟探險記

源

泉

此宿の入口に左の如きお達が貼り出してある。

舌代

今般其船の御達により一切各項遵守相成度此段申進候也

第一條 男女混浴せしめざる事

第二條 十五歳未満の男女にして不貞少年を囑むるものは宿泊せしめざる事

第三條 賭博常習者、娼客止、癩病者各宿泊せしめざる事
 といふものである。この禁制はよく／＼の必要があつて布達されたものであらうが、一向遵守されてゐないのは事實である。

夕方になると夫々の働き先から續々歸つて来る共同炊事場は火事場のやうである。大盛めして腹を拵へた連中は早や車座になつて色々な話に花が咲く。晝間から宿に寝そべつて居た六十許で布袋のやうな老人があつたが、夕方になるとムク／＼起き上つて室の一隅で飯を食つてゐる、今しもデ／＼大鼓を提げて入つて来た五十才許の男に聲をかけ、

布袋「法華屋さん今かいな、今日はエラウ遅いで、又引懸つたのかと心配してゐましたよ」

法華「さいな、到頭舉げられましたナ、ヒドイ目に逢ひましたのや、今福で引つかまつて半日稼が

ずに散々膏を搾られたがナ、それで今福分署から天王寺署へ、天王寺署から難波警察へ巡查に送られましたナ、幸ひ難波に籍が置いてあつたもんだから助かりましたが、さも無かつたら拘留ものでしたのや、行者さんは到頭留められましたわいな」

布袋「道理で行者さん見ねませんナ」

法華「此通り少々米の貰があつたものだから乞食といふて巡査が承知し居らん、困りましたよ」
 ○「お四國詣の老人夫婦も、今日から廢めたわいな」

△「あの老爺さん、八卦屋をするちうてたが、老婆さんは朝から散紙賣に出ましたよ、まだ戻らんかナ」

乞丐浮浪は固より法の禁する處で、從來警官が其掃蕩に力を盡してゐるが、之を禁しても他に生活の道なき彼等は又しても同じ道にさまようのである。自然大概は大目に看過して来たが、此度の大演習につき貴顯精神が大敗に集るといふので俄に取締が嚴重になつて、乞丐類似の者は固より車の

先曳、辻占賣等でも見苦しき風体の者は見當り次第追拂ふといふ騒ぎ、誠にはや安宿生活者の大恐慌である。

列座の面々は孰れも羅漢か仙人かといふ風体、海松か若布のやうなのを纏ふた者さへある、衣服の全きものは殆ど無い。ツルリつと白光つた癩病患者らしい者、ブク／＼腫れたやうな色の悪い男、乾物のやうに乾枯びた老人等の中に二十才位の若者で骨格逞しきが垢に塗れた襦袢を纏ふて大平樂を言つてゐる。

○「お前昨夕は戻らなかつたナ」

若者「ウム、俺昨日平野まで一回先引した限りで十錢しか儲からなかつた、その十錢でめしを食つて平野郷の宮さんで寝て来た」

△「今日は大分儲かつたかい」

若者「今日は五十錢程儲かつたが、昨日の埋合せに三十錢程食つて了つた。一度に大盛を三ツも平げたからナ」

記者「お前さんのやうな若い人は勞働下宿へ行つて力役を稼いだら宜からう」

若者「先曳は樂で可いせ、仕事が多い時には堺へ二返する事もあるからな」

三返する事もあるからな

車の先曳は普通一帳場と稱せらる短距離の荷車の先曳で四五錢、少し遠くなれば八錢乃至十錢位、旅商人の荷車なら一里十錢位、肥料車が七八錢だが、無論折衝の結果マクゑる事が多いといふ。今宮の安宿に止宿せる彼等の仲間は住吉街道、平野街道を往復する荷車を顧客とし、日々多少の金を得て生活してゐるが、時としては食はす飲まずで露宿することも尠からずとか、木賃宿生活に墮落せる者は一般に體質劣等にして低能に近き者多く、僅かに自己一人の糊口を凌ぐのみで、他に何等奮發の刺激なき故、其能力は次第に頹敗衰耗するのであらう。特に先曳の仕事は安樂な割には利得が多いから、一旦其境涯に墮落したら再び困難な勞働は出来ぬさうである。

七錢組の中に子連の夫婦者が一組、彼等は室の一隅に陣取つて自炊生活をしてゐる。夫はリウマチスで稼が出来ぬとかで、細君が四歳許の子供を脊負ふて辻占賣に出る。夜半過まで働く多きと

きは二十錢は儲かるさうであるが、宿料に追はれて碌々食ふ事も出来ない云つて居る。子供が腹を減らして焼芋を買つてくれと強請ひと両親は色々骨折つて胡麻化さうとするが、却々承知しない餘り可哀さうであつたから子供の掌に二錢握らしたら、夫婦は許多數お辭宜をしてゐた。日暮頃から稼に出る車夫がある、車は大分見苦しいが一日の損料十三錢だといふ。斯る車では夜間でなくては乗客が無いと云つてゐた。夜半過迄働いて三十錢乃至五六十錢の揚高があるが、損料と宿料を引去ると漸う食ふ丈で、病氣にでも罹らうものなら、宿料は待つて呉れても自身は絶食するより外に詮方が無いと云つて居た。

夜が更け行くと銘々に薄蒲團に包まつて、過去の榮華物語などに耽つて居る。記者も與へられた蒲團に潜り込んだ。喫煙するにも火鉢も煙草盆も呉れぬから、朝までには各自に枕頭に燐寸の燃燼と吹殻の山を作るのである。此時此夜、金殿玉樓に夢醒かなる人もあらうに、此は又何たる殺風景の生涯ぞと坐ろに哀愁を催したのである。

九

夏の夜の蚊厨の中の暑苦しさは如何許りであらうさて又冬の夜の嚴寒を如何にして凌ぐであらう

不快の一夜が明けると、ブラリト宿を出て長町の貧民窟に入込んだ。愛染橋の東詰を北へ入ると所謂蜂の巢長屋がある。路次の口の駄菓子に入つて先づ敵情偵察を試みる

記者「此邊で二階か座敷かを貸宅はありませうか」
老妻「幾程もありますよ、」

記者「此邊の家は皆小さいやうですが、それでも貸して呉れるでせうか、」
老妻「大抵一軒に二組も三組も居るがナ、聞いて見なさい」

少し奥へ進むと一軒の門口に「さしきかし」の貼紙がある。突と這入つて家賃を尋ねると貸室は入口二疊の室で日拂十八錢だといふ。前の安宿の賃間に比べると大分高い。更に先へくと開合せると二階なら四疊半で八錢、下の二疊は四錢といふがあつた。之が一等廉かつたが亦一番不潔であつた。一般に室内の不潔な事は労働下宿や安宿以上で

ある。建物が小さいのと警察の干渉が宿屋は厳しくないからであらう、先づ貧困な特種部落どしか見ぬ。住民の生業は羅字仕替、洋傘直し、鐮かしけ、下駄直し、屑屋、紙屑屋、人力車夫、日傭稼等見で女房や娘共は大概紙屑拾ひをやつてゐる。彼等は紙屑と共に木片、竹切、古下駄などを拾つて來て薪にするさうである。關東煮、上燗屋等を營む者もあると見えて、屋臺車の置かれた家もあつた。

附近の屑物寄せ場(消毒所)へ這入ると、拾つて來た紙屑を金に替へて歸り行く二人の婦人がある。記者「私は仕事が無くて困つてゐるが、一つ紙屑拾を行らうと思ふ、一体幾何程儲かるですか」
△「幾何といつて、大概十錢か十四五錢だよ、今日は十二錢儲けた」
記者「まだ午前だから、午後も往つたら大分になるでせう」
○「午後には往つても何も有りやアしない、屑拾は早朝から午までだよ」
△「お前さんは男だから、紙拾ふより荒い拾物があらア、古俵、木片、繩片など……其方が儲か

多いわナ

成程、車に木片や繩片など拾つて來て居るものがある。彼等は寄せ場其他へ向く物は賣り、木片は薪として近隣の者に賣るさうである。

午後は關屋町方面を探險した。其慘怛の狀は大同小異であるが、家賃は月勘定の前拂で、店三疊が貳圓、押入付三疊で三圓位の相場である。貧民窟裡で數日間の同居生活を試みたいとの豫定であつたが、さて實際を見るに及んでは頗る逡巡せざるを得ん。垢で結核菌の巢窟としか見ぬから堪らぬ。中之島へ迂回して日没後宿に歸ると、顔馴染の誰彼が何か「仕事が見付かつたか」と尋ねてくれる。記者は朝出掛けに仕事を捜して來ると云つて出たからである。

記者「終日奔り廻つたが何も無い、困つたなア」
○「お前先輩をさつせい、曳繩を一つ買つたら宜いが……金が無けりや繩切れでも可いわナ」
記者「何處に出たら可いだらう、お前さん手引してくれんかナ」

○「何處で 街道側なら可いよ、澤山仲間が居ら

アナ

記者は遂に先曳の榮職に推舉されたのである。隣室の三疊に陣取つて居る四國通路營業の老夫人は塵紙が少しも賣れなかつたとの愁嘆で、此分では飯が喰へぬから何處か他國へ行かねばなるまいと云つてゐた。法華屋さんは今日は終日宿に閉籠つて布袋さんと將棋をさして暮したさうである。先曳の若者は未だに顔を見せぬが、今日も仕事に溢れて野宿したかも知れんとの噂、くさくさの取止めない話を聞くともなく聞いてゐたが……それから後は貧富一如の夢の中。

眼が覺めると日光が室内に射込でをる。記者も餘程不潔に慣れて安らかに夢を結び得るやうにはなつたが、朝起ると虱や蚤の噛んだ跡の痒さに一苦勞する。今朝はシャツを脱いで裏を返して着て見たが暫く経つと又チク／＼遣り出す。顔を洗つて宿を飛出す時、色眼鏡を懸けやうと腹掛を探ると無残や細々に毀れていた。夜中寢返つて敷き粹いたのであらう。

住吉街道をブラ／＼歩いて見ると、此處彼處に

僅かに一飯に飽くことを求むる外には些の慾望をも有せざる程に憫むべき心身を馴致せる事情等を知ることが出来た。

貧民世界のドン底は安宿であるが、此處に落ち来るまでには多くは貧民窟若くは勞働下宿を経由して居る。仕事を求めて地方から出て来る青壯年の男子にして、手蔓もなく保證人も無きものは、是非なく先づ勞働下宿に行く。下宿は萬事を引受けてくれるから頗る便利ではあるが、營業者は仕事の間斷を見込んで不廉なる宿料を食ひ、極めて劣悪なる待遇を爲るのであるから、勞働者はその体力の消耗を補給するだけの營養を得ることが出来ない。随つて會では強壯なりし彼等の身体も、間もなく元氣阻喪して餘儀なくも懶惰に流るゝやうになる。そして漸次劇しき勞働に任へぬ程になると、下宿にも見離され、遂には安宿に墮ち來つて乞食類の先曳など日を送るのである。

又諸種の原因に依りて一朝貧困者となつても、多少家財諸道具の有る間は貧民窟に一戸を構へ、更に零落すれば室借などして生活をするが、夫を

先曳先生が不景氣な顔して眠んで居る。三十才位の者も見受けるが、大概は四五才で而も一人として健康體と見ゆる者はない。勞働も人並に出来ぬやうな連中が此境界に墮落するからであらうと思はれる。今宮新境界の貧民窟を視察して午頃に宿に歸ると、青嶋陷落の噂ど／＼で、安宿の中にも世間並の愛國心が漲つてゐた。

此夕再び宿に歸つたが、最早一通りの探險は済んだから、一先づ切上げることに決心し、宿に預けた荷物を受取ると、附近の理髮床で二ヶ月越の頭を刈つて洗湯で一浴した、虱の巢を靴に振込み着物を改めて元の田舎老爺となり、湧きかへる提灯行列を電車中から眺めながら自宅へ向つたが、勞働下宿や安宿に在る同胞の上を想ふと、言ひ知らぬ淋しさを覺るのであつた。

十

約一週間に渉る貧民の實情調査は記者の蒙を啓く所頗る多かつた。一概に貧民とはいふものゝ、其種別禁度の頗る多種多様であることや、貧民窟や安宿に落ち来る徑路の種々なることや、彼等が

も漸次賣拂つて無一物となると、こゝに初めて安宿に時を求めるのである。殊に彼等の間に生れた無垢なる兒女は品性に身体に生れながらの悪影響を受けて、第二の赤貧者なる素質と運命を有つて居る。恐らく成長の後と雖も此境界を脱することには困難であらう。而も此等の貧民後繼者は禽獸的夫婦關係を以て盛に増殖されてをる。

斯る事情に依つて、貧民窟や安宿は此等劣敗者の集合生活場となり彌が上に頹廢を加へつゝあるが、之に動像を説き力行を勸めても、彼等の境遇として將又事情として殆んど不可能の事である。普通一般人に對すると同様に、貧困は各自の自業自得なりなどと責むるは恐らく餓虎に向つて草食の仁を説くと同一の無理であらうと思ふ。

人間と生れた者で自ら求めて貧困に陥るものは決して無い。世間の財産ある者若くは藝能ある人でも、裸一貫の身から奮闘努力して仕上げた者は極めて稀で、大多數は父祖の餘澤遺産を基礎とせる一種の幸運兒である。同様の理由で貧困者の多數も亦種々の不幸非運や社會の缺陷に左右せられ

て遂に此極に至つたのである。中には自己の非行即ち放蕩、飲酒、賭博、怠惰、犯罪等の經歷ある者も寡くないが、此等は貧民窟や安宿生活の遠因になつてはゐるやうが、直接の原因となつてゐる者は案外に少い。多くは本人の虚弱、家族の疾病、扶養者の死亡、事業の失敗、子澤山、失業者が直接原因をなして居る。

彼等の多數は營養不足に原因する衰弱や、生來の虚弱の爲め、収入多き勞働に就くことが出来ぬものであるが、中には何んでも遣つて見る心掛の者があつても保證人なきため仕事を得られぬのである、随つて彼等が最大の収入とても僅かに飢餓を醫する料として消費されるに過ぎない。何故なれば、宿泊料にても家賃にしても、將又食費にしても割合上頗る不廉なため、殆んど浮ぶ瀬が無いのである。試に思へ、安宿の最下等宿料は一泊七錢で一ヶ月貳圓十錢となる彼等にして寢具と保證人とあらば、塙末では立派な二階を借切ることの出来る金子ではないか。然るに彼等は赤貧なるが爲めに粗末極まる待遇に多額の出費を餘儀なくさ

れて居る。勞働下宿の一日三十一錢は一ヶ月約十圓である。普通ならば十圓の下宿料は相當の御客扱を受けられる筈ではないか。木炭や薪や醬油にても一錢二錢宛買ふは一圓二圓買ふより遙かに高價なるは事實である。蓋し植てるは之を培ひ傾くものは之を覆へずは天地自然の道かも知れない。併し乍ら、世人は彼等の不心得や意氣地なきを責むるよりも、寧ろその犯罪に至らざるを褒めてやらねばならぬ。彼等の多數は犯罪を敢てして一旦の快を食ふよりも寧ろ乞丐に近き生活に甘んずる程卑怯懦弱に成果てゝをるのである。換言すれば彼等は泥棒らしき泥坊になるだけの元氣もない斯く迄に彼等社會が奮勵を缺き風儀を頽して平然たるは實に境遇の罪であると思ふ。之を改善誘掖して價值ある勞働力供給者に仕立つる必要は無い乎、或は又現在の如く自然に放任して彼等の繁殖増大を傍觀して可からう乎、是れ決して等閑視すべき問題ではあるまい。記者は彼等の慘憺たる實況を目撃して一種の恐怖と悲痛の感に打たれたのである。(未完)

追 悼

ヘンダーソン博士の訃

(口繪参照)

本年四月二十七日刊行シヤン・アドマイザ紙所載のシカゴ通信に曰く

三月三十日の早朝チャールストン市よりヘンダーソン教授逝去の報當地に達するや、シカゴ大學は直ちに半旗の弔禮を行ひ市内到る所に哀悼の聲を聞かざるはなかりき。

博士が會長たりし同盟慈善協會の事務所の如きは各員孰れも悲しみに沈めるを見たり。

昨年末より本年首へ掛けての冬期中、醫師は博士に忠告するに静養の必要なる旨を以てしたりと雖ども、博士は之を顧みずして依然其職務に勉勵し幾多の業務に忙殺せらるゝの傍ら、シカゴ市失業救済委員會の會長としても亦た極力盡瘁せられたり。

博士が臨終の枕頭に侍したる人は未亡人を始めとして、シカゴ大學總長ジャドソン氏、全大學社會學部教授スモール氏等なりき。實にヘンダーソン博士は二週間以前にチャールストン市に赴かれたる許かりにして全地到着後病体差重もり四五日前よりは麻痺をさへ來たりたり。

葬儀は四月の第一木曜日午後二時三十分を以て大學校庭内の「レオン、マンデル」會館にて執行せらるべく、全大學に於ては當日正午限り授業を休み各科職員生徒は皆な葬儀に參列すべしと云ふ。

葬列の際靈柩の兩側に隨從する人々の氏名はピツクハム及ヘッスの二氏にして、他に兩名の學生も亦た棺側に立つべし。尙ほ名譽棺側隨從者はスウキット氏、メチエム氏、ホール氏、ホーベン氏トーマス氏及クルター氏なり。

儀式中聖書朗讀は神學部長マシュー博士之れを勤め、祈禱はハイド、バアリの浸禮教會牧師ギルキー氏之れを捧げらるべし。

埋葬はオークウッドの墓地にて之れを行ひ埋棺前全所の禮拜堂に於て更に簡單なる儀式を執り行は